
僕たちの挑戦

尾道貴志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕たちの挑戦

【Nコード】

N1208V

【作者名】

尾道貴志

【あらすじ】

「あなたの夢を私が叶えてあげる」そんな魔法の言葉にとまどいながらも、少女たちは自分の夢を追いかけていきます。よかったらちよっただけ応援してあげてください。

FC2ブログ（僕たちの挑戦）にて同時進行で連載中です。毎週金曜日更新（予定）

僕たちの挑戦 <http://garakutan2012>.

喫茶 「がらくた館」

1 喫茶「がらくた館」

カラカラカラン

乾いた鈴の音とともに扉が開きゆるやかな風が舞い込んできた。風と一緒に飛び込んできたのはユカ。日に焼けた肌に昼下がりの陽射しが眩しい。

「マスター こんにちは！」

「いらっしやい、ユカちゃん。あれ学校は？」

「なに言ってるの、今日からな・つ・や・す・み」

「そうか、そりやおめでとう、健全な小学6年生よ」

「ありがとう。これ『ハハ』からの差し入れ、田舎から送ってきたモモだって」

「おお、これはまた、かたじけない」

「何にする？」

「オレンジジュース」

「通信簿の出来悪かったんだ」

「えっ、何で分かるの？ ポーカーフェイスに自信あったのに」

「ユカちゃんが機嫌のいい時はレモンティー、それでもって落ち込んでるときはオレンジジュース」

「うぬ、やるなおぬし、さすがプロ」

「おほめいただき光栄です。数あるお客さんの中でも小学生の常連さんはユカちゃんだけですからね」

喫茶「がらくた館」は小さな港を見下ろす山の山麓から少し登った所にある。坂道だらけの町は石畳が連なり、旅ゆく人の心を懐かしい気持ちにさせてくれる。店のすぐそばには観光用のロープウェイ

イ、山の頂上からは青い海と緑の島々、眼下の港はまるでミニチュアセットのようだ。

「ね、マスター、ちょっと相談があるんだ」

「うーん、どうしようか。タダってわけには・・・」

「いじわる　！」

「あとで　リムーまで買い物頼もうかな」

「リムー」は坂道を5分位下りたところにあるフルーツショップ、この店のレモンの味は格別、酸味と苦みと甘味のバランスが絶妙だ。こんなに「素敵な」レモンにはなかなかお目にかかれない。ちなみに「リムー」はペルシャ語で「レモン」の意味。店の主人はアラビアマニア、果物のPOPがアラビア語で書かれてある。「なんて書いてあるか読んで！」と頼むと機嫌がよくなりレモンをおまけにくれたりする。

「了解」

「よし、交渉成立、で何なの相談って」

「うーん　信じてもらえるかわからないんだけど・・・不思議なことがあってね・・・」

「・・・」

「誰にも言わないって約束してくれる？」

「ふむふむ」

「マスターなら私より人生長く生きてるし、いろんな経験もしてるでしょ、お客さんの相談にも乗ってるだろうし」

「なるほど、でもユカちゃんは1つ大きな勘違いをしてる」

「えっ何？」

「この店ができてどれくらい？」

「えーと、あたしが6年生になってからだから・・・3か月！」

「だから僕もマスター3か月」

「えっ、うそ、ほかの場所でずっとお店やってたんじゃないの」
「いや、初めてだよ」

「だって、注文で私の気持ちを当てたり　そうは思えないけど」
「だって、ユカちゃん開店してから2日に1度は来てるだろ、がらくた館の最初の常連さんてわけ」

「常連さんって言われると嬉しいけど、家が隣だからだよ、私のお小遣いじゃ週に1度しか注文できないし」

「いいんだよ、毎日のように顔を見せてくれればそれで常連さん、今日だってモモもらっちゃったし」

「そっか、わたし常連さんなんだ」

「前は何やってたの？」

「サラリーマン」

「へー、なんで辞めちゃったの？」

「50歳になった記念に」

「ずっとサラリーマン？」

「ううん、ちがうよ」

「その前は何やってたの？」

「学校の先生」

「うっそー　ちょっとだけ衝撃」

「何で、見えない？」

「うん、見えない」

「どうして」

「見た目もヒゲ面だし、イメージ合わない！」

オレンジジュースの水が溶けてカランと音を立てる、窓の外からは船の汽笛の声がゆるやかに忍び込み、2人の会話をほんの少しの時間だけ止めてみせた。

「ところで何だっけ、その不思議な出来事って」

「うん・・自分でお願いしといて何だけど、話そうかどうかちよっ

と迷ってる・・・」

「どうしてだい？」

「夢みtain話だし、それにちよっぴり怖い・・・」

「いいよ、僕もちよっと興味がわいてきた、話す気持ちがあ固まってからじっくり聞くから」

「ありがと、じゃ、買物先に行ってくるよ」

「そうだね、夏の太陽をいっぱい浴びておいで」

ユカはショートカットの髪を軽く揺らすとリムへ向けて駆け出していく。坂道の下では夏の光に輝くレモンたちがユカを待っていたかのようにキラキラと笑顔を見せた。

「サラーム ユカちゃん」

「サラーム おじさん！、ペルシャ語覚えたよ、『こんにちは』でしょ」

「おっ、うれしいね、今日は何をお求めで？」

「レモンを20個、がらくた館のお使いなの」

「そりゃ感心、ではとっておきのエメラルドレモンを1つおまけしておこう」

「ありがと、わっ、きれい！」

「持っているると幸運が訪れる」

「信じる！じゃ、また来ます」

カラカラカラン

「お帰り」

「ただいま、はい、これレモン、おじさんおまけしてくれたよ」

「さてはペルシャ語しゃべったね？」

「ご名答！」

「こりゃすごい、エメラルドレモンだね」

「うん、持っていると幸せになれるんだって」

「それは素晴らしい」

「マスター、気持ちの整理ができました、話を聞いて下さい」

「はい、お待ち申しておりました」

放課後

2 放課後

「ユカ、成績どうだった？」

「うーん・・・かなり微妙」

「しーちゃんは？」

「頑張ったわ、これで夏休みにミュージカル教室に通わせてもらえ
ると思う」

「よかったじゃない、約束果たしたんだ、すごいね」

「必死だったもん。オールA取れたらミュージカル教室、呪文みたいに唱えてた」

「おめでとう、やったね」

「ありがとう」

ユカの小学校の通知表は小学校では珍しい5段階評価。AからEまでのアルファベットがにぎやかに並ぶ。各科目に4つずつの観点があるのでオールAともなれば32のAが並ぶことになる。「5年生と6年生はしっかりと自分の学力を自覚して、中学に行って困らないように」という校長先生の考えだそうだ。

「あたしはオールCにBがちらほらといった感じ、ちょっと帰るのが
気が重いな」

「夏休みは講習？中学受験するんでしょ」

「うん、せっかく小学校最後の夏休みなのに、ほとんど遊べないと思
うとね」

「テニスは？」

「合格できるまではお預けかな」

「しーちゃんはずっとミュージカル？」

「あさってから全部で30日間、途中でプロの公演も見られるし、最後にはオーディションがあるの、でも、安心して、サマーキャンプは行くから」

「よかった、あたしもキャンプだけは参加させてもらえそう、何しろみんなで行ける最後のキャンプだからね」

毎年行われるサマーキャンプにユカたちが参加したのは1年生の時、この時に親しくなった5人組で毎年欠かさず参加してきた。最初は母親同士のつながりから始まったキャンプも4年生からは自分たちで出し物を考えたりオリエンテリングコースを決めたりと夏の最も楽しみなイベントとなった。

「よう、お待ちせ」

「お、来たな3人組」

「さあ夏だ、キャンプだ、お祭りだ」

「野球の合宿は大丈夫なの？」

「おう、危なかったけど1日ずれてくれた、セーフ」

「ところでさ、大ニュース」

「なにになに」

「ちよつとショックなんだけど、な、教授」

「僕、引越すことになった」

「えっ、うそ」

「父親の転勤が決まった」

「どこに？」

「アメリカ」

「なんかちよつぴりかっこいいね」

「ま、これも人生経験の1つだし」

「相変わらず冷静ね、すぐに行っちゃうの」

「いや、卒業後の4月」

「そっか、さびしいけどちよつと安心、すぐにいなくなっちゃうの」

かと思ったわ、キャンプは行けるんでしょ」

「もちろん」

「ウルシは聖学目指すの」

「おう、なんたって野球の名門だからな、プロを目指すにはしつかりしたチームでないと、まっ、オレの偏差値でも何とか入れそうだし野球のセレクションに通れば合格ラインを少し下げてくれるんだ」「燃えてるね、野球少年、ところで聞いて。しーちゃんオールAとったの！」

「へーすごいじゃん、これでミュージカル教室だっけ」

「おめでどう志水さん」

「ありがとう、教授」

「ロクちゃんは元気ないね」

「いつものことだよ、何しろ今日はロクの最もブルーな日だからな」

「ああ、志水さんすごいよな、ぼくの通知表なんかDのオンパレードだから、先生はよほどの事がないとEはつけないって話だから、実質オールEみたいなもんさ、勉強できるみんながうらやましいよ」

「ロクちゃん、大丈夫、あたしも勉強苦手だし、仲間・仲間」

「ユカの言葉あまりフォローになってない気がするんだけど」

6年生にもなると変に男女が意識して、お互いに反発したり、妙によそよそしくなったりする。現に同じクラスの中には今までに感じたことのない変な雰囲気を感じることもあったし、誰かが誰かに告白メールを送ったなんてうわさも流れたりした。けれど5人組は何とも自然体、ユカは思う。（このまま、ずっとこの仲間で過ごしていきたい、こんなに落ち着ける居場所はないから）

「ところで、キャンプだけど」

「最終日のナイトパーティーの出し物は1グループ6分、優勝賞品はメンバー全員の写真の入った記念パネルに自分たちでデザインできるオリジナル携帯ストラップ」

「園田君、やっと元気になったみたいね」

「へへっ」

「去年は入賞できなかったからな」

「毎年、優勝は6年生のグループから出てるから、今年はなんとしても優勝だ」

「教授、去年の優勝ってどんな出し物だっけ」

「モンスターに仮装してダンスを踊った、あれは見事でした。音楽が鳴って登場した瞬間に大歓声が上がったのを覚えてる」

「みんな考えてきた？じゃ、ウルシから」

「あ、悪い、まだ考え中」

「しーちゃんは」

「一応持ってきたけど・・・」

「教授は」

「ごめん、まだです」

「ぼくも・・・」

「えーっ、ロクちゃんも、ダメだなあ男子」

「まあ、いいじゃない、ユカ。わたしも考えてきたけど何となくだし、私たちににとって最後のナイトパーティーだからみんなで1から話していきましょうよ」

「おお、それがいいよ、さすがは志水さん」

「ぼくも賛成だな」

「ロクちゃんも調子いいんだから」

「じゃあ、みんなでアイデア出しましょう」

「しーちゃんがそう言うなら、そうしますか」

「さんせーい」

最後のナイトパーティーという言葉がユカの心にチクツと刺さる。卒業したらウルシは野球の名門校へ、教授はアメリカ、しーちゃんもミュージカル学院に通える東京の寮制の学校を受けられるらしい。ロクちゃんは地元の学校へ、そしてあたしはどうなってるんだろう。

みんなが離れ離れになる光景が頭をよぎる。この仲間と一緒に過ごせるのも限られた時間しかないんだ・・・

放課後の静かな廊下にけだるい風が少し足早に通り返けた。

落雷

3 落雷

「じゃ今のところは何か音楽をやるってことでいいか、どう教授」
「異議なし、ずいぶん時間がかかったね」

「いいじゃないの、キャンプまで時間はあるし、じっくりみんなでいいものを作っていきましょうよ」

「志水さんがいいならばくも賛成」

「ロクちゃん、自主性、自主性」

「ところで今何時になった？」

「4時過ぎよ、先生には5時までは教室を使っていって許可をもらってるから」

「なんだか外が暗いよ」

「ほんと、真っ暗、夕立かも」

「降り出す前に帰らなくちゃまずいな」

3階の教室の窓の外は暗雲が立ち込め、まるで夜のような暗さ、遠雷がかすかに耳を掠める。

「早く帰ろう、あたしの苦手なもので雷はかなり上位」

「そういえば2年生の時のキャンプでユカが雷で泣き出してキャンプリーダーにずっとつかまってたよな」

「不名誉な思い出」

「だれだって怖いものはあるわよ」

「志水さんは？」

「私はガンダム」

「何、それ？」

「ゴ・キ・ブ・リ、口にするのも怖いからそう呼ぶの。我が家では

通じるわ」

「それ、最高。ガンダムが出たーって叫ぶんだ」

「あ、ガンダム！」

「キャッ！」

「冗談だよ」

「漆山くんの意地悪！」

不気味な外の景色をよそに教室の中に華やかな笑い声が響く。

「おっと、どうやら間に合わなかったみたいだね」

バラバラという激しい音が教室中に響く。降り出した雨はドラムをたたくがごとく音を立てて窓に吹き付けた。間をおかず一瞬空を白く稲光が染める。遠くに見える港の船が影絵を見るみたいにシルエットになって浮かび上がった。続けて地鳴りのような雷鳴。

「きゃーっ、神様助けて！」

「ユカちゃん、ぼくは神様じゃないから離して。Tシャツ伸び切っちゃうよ」

「ごめんロクちゃん」

「稲妻が走るのはつきり見えたぜ」

「あっ、また光った、来るぞ」

「もういやー」

バリバリッ！ およそ雷とは思えぬ音と胃袋に響くような衝撃が5人を飲み込む。瞬間今まで見えていた互いの顔があっという間に見えなくなった。

「て、停電だ」

「ほんとに助けてー」

「すぐに回復するよ、学校には自家発電装置があるからね」

「教授はこんな時でも冷静だな」

「ま、真夜中ってわけじゃないし、ほら、みんなの顔も目が慣れて見えてきた」

知らず知らずのうちに小さな輪になり身を寄せ合っているのに気づく。気がつくともみんなの顔が目の前にある。ちょっぴり驚くとともに、なぜかユカは嬉しい気持ちにもなった。

「あっ電気が灯いた」

「みんな、大丈夫？」

「だ、だいじょうぶ・だと思う」

「ユカ以外は大丈夫みたいだな、けっこうでかくてビビったけど、よく考えたら学校にいる限り安全だよな」

「さっきのは、もしかしたら学校の避雷針に落ちたのかもしれない、これ以上大きいのはないよ」

激しい雨は相変わらずだが、雷鳴は心なしか小さくなりスプリンターのように学校の上のトラックを駆け抜けたように思えた。

「雨が止むまではもう少しかかりそうだからこのまま、教室雨宿りといきましょう」

「そうね」

「えっ？」

「今のユカの声？」

「あたしじゃないよ」

「えっ、だって女子2人しかいないよね」

「もう1人いるわ」

「えっ」

「えっ」

「ほら、あなたたちの後ろ」

声は教室の後ろで身を寄せていた5人の背中越しに聞こえてくる。教室の前を見ると教卓の上に誰かが腰をかけているのが見える。

「おまえ、だれ？」

「うちの学校の生徒じゃないわ」

「な、なんでそこにいるの」

5人は狐につままれたように顔を見合わせると再び教卓を見つめ返した。そこには見たことのない少女が1人、いたずらっぽい笑顔でこちらを見ている。年のころは同年代か中学生くらい、青いワンピースのような光沢のある洋服に、少し先のとがったエナメルのかこれまたピカピカ光る白い靴が蛍光灯の光を反射してまぶしい。足をぶらぶらとゆっくり揺らしながらも一度5人に笑顔を振りまいた。

「あなた、本当にだれ？」

「ま、だれでもいいじゃない、雷はもう来ないわ、安心して」

「中学生？」

「まっそんなところかしらね、とにかく、はじめまして」

「こちらこそ、で、なんでここにいるの、いつ入ってきたの」

「さっきの停電の時におじやましたわ。気がつかないのは無理ないけど。ね、あなたたちよかったら少しだけ私とお話をしない、悪い話じゃないから」

「お話？」

「そう、話を聞くぐらいいいでしょ」

「まあ、聞くだけなら・・・」

5人は再び顔を見合わせお互いの怪訝そうな顔を確かめ合う。な

ぜか断りきれない不思議な気持ちに全員がとまどっていた。

少女

4 少女

「あなたたちの夢は何」

「夢？」

「そう将来の夢よ、志水さんは」

「えっどうして名前を？」

「私はなんでもわかるのよ」

「私はミュージカルスターになること」

「漆山君は」

「オレはプロ野球の選手になる」

「町田君はアメリカに行くんだっけ」

「宇宙工学の専門家が目標です、英語を勉強するにはいいチャンスだと思っています」

「さすがね」

「篠宮さんは」

ユカはとまどった。（みんなすごい、今からはっきりとした夢を持って、それに向かって頑張ってるんだ、それに比べてあたしは・・・）

「あたしはまだ・・何をしたいのかわかってないの、みんなを尊敬しちゃう」

「心配しないで、小学生なんてそんなものよ。今から明確な夢を持っている人の方が少ないんじゃない」

「・・・」

「あなたもそのうちにきつと見つかるわ、どんな未来かはお楽しみ」
「最後は園田君」

「ぼ、ぼくは・・・」

「何？」

「ちよつと恥ずかしくて言えないよ」

「恥ずかしいことなんかないわ、夢なんだから」

「でも、話したらみんなに笑われるかも・・・」

「ロク、大丈夫だよ、誰も笑ったりしないって」

「そうよ、園田くん」

「うん、建築家になりたいんだ、ほらぼくの家は小さくておんぼろだろ、だからうんとカッコイイ家を設計して家族に家を建ててあげるんだ」

「ロクちゃん、素敵、とってもいい夢だよ」

「でも、ぼく算数も技術家庭もDだし・・・」

「あたしもCだから」

「だからあんましフォローになってないって」

5人は初めてお互いの夢をはっきりと知った。知らず知らずのうちにみんな大人になってるんだ。ユカは少ししょっぱいような気持ちになる。夏休みに通う塾の講習が何となく頭に浮かぶ、あたしも頑張らなくちゃいけないんだ。

「みんな立派じゃない、感心したわ、ねえ、あなたたちの夢を叶えてあげましょうか」

「えっ夢を叶えるだって」

「そうよ、悪い話じゃないでしょ」

「そんなことできるの？」

「そうだよ、オレたちをからかってるんだろ」

「信じるか信じないかはあなたたち次第ね」

「そう簡単には信じられないです」

「それはそうね、でも夢は叶えてみたいでしょ？志水さん、あなたはミュージカルスターになりたいんでしょ、でも必ずしもなれると

は限らない、きっと夢を目指してる人のせいぜい1割程度じゃない、実現できる人って」

「・・・」

「漆山君、聖学に行ったからって将来プロになれる保証はないわ、きつとあなたより野球の上手な人はたくさんいるでしょうし、どんなに努力しても怪我や故障をしてプロにまでたどり着けない人が山のようにいる。科学者だってそう、10年以上大学で勉強して何本も論文書いて、それでも教授にならない人はいっぱいいるのよ」

「テンション下がるよなあ、なんか、オレたちに恨みでもあるんじゃない」

とまどいは小さなぐちとなって少女に向かった。夢は必ずしも叶うものばかりじゃない。

ユカは初めてそのことを感じた。今までは夢というのは心に持ち続けて努力を重ねていけばいつかは必ず叶うものだと思っていた。自分もやりたいことさえ見つければ夢が実現すると何となく信じていた。でも、そうじゃないんだ、世の中には叶わない夢もいっぱいあるんだ。

「あなたのいうことはわかったわ、でも、どうやって私たちの夢を叶えてくれるっていうの？」

しーちゃんが珍しく怒ったように詰め寄る。

「あたしの言う通りにすればいいだけ」

「何をすればいいのかな」

「ちよっと待て、ちよっと待て、だまされるな、こいつは新手のサギだ、きつとこのあと小遣いを持ってこいとか、何かチケットを売りさばけとか、そんな話になるに決まってる。ばあちゃんが言って

たぞ、上手い話に気をつけろって」

「くくっ、すごい想像力ね、あなたならサギに引っかからないわ」

「やっぱり信じられない」

「信じられない」

「そんなの信じられないよ」

ユカ、教授、ロクの言葉が思わずかぶる。

「そうね、いきなり信じろという方が無理かもね、じゃこうしましょう、1つ予言をしてあげる、それが当たったらあたしの話を信じてくれる？」

「予言だって？」

「おもしろい、予言してみろよ、最も大したことはできないだろうけど」

「明日の午後1時過ぎにこの町でちょっと大きな地震が起きるわ。港では積荷が崩れてけが人も出る、でも命には別条ないから安心して。どう、さすがに地震ではうそはつけないでしょ」

「うっそー」

「だから言ったでしょ、信じる信じないはあなたたち次第ですって」
「・・・」

「もし、信じてくれたなら、こうしましょう、3日後の夕方の5時この教室に来て。そこでまたお話しましょう」

「どうする？」

「地震なんて予言できるわけないと思うけど」

「うん」

「わかった、きっと来るよ」

「信じてくれてありがと」

「3日後の午後5時でいいんだな」

「ええ、午後5時きっかりにしましょう。ただし、チャンスは1回きりよ、その日に来なければこの話はおしまい。心配するでしょう」

から家族には言わないほうがいいかもね、もちろん危険なことはないから」

全員が顔を見合わせた次の瞬間、少女の姿はどこにもなかった。
「き、消えた・・・」

予言

5 予言

「というわけなの、マスターどう思う」

「これはまた不思議な話だね」

「でしょ」

「お母さんには？」

「話してない」

「今の時点ではそのほうが賢明かな」

「話したって信じてくれるわけないしね、危ないから行っちゃいけないって止められるのが目に見えてるし」

「夢か・・で、ユカちゃんはどうするの」

「あたしまだ将来何がやりたいのか自分でもわからないの、だからピンとこない」

「なるほどね、でも1つだけアドバイスするなら、夢って人に叶えてもらうものじゃないんじゃないかな、僕もこの店出すまでにいろんなことがあって50年かかったわけで、でも、それだけにものすごく愛着もあってね、こうしてユカちゃんがお客さんとして来てくれるのが本当に嬉しいんだよ」

「そうだよね、よく考えてみたら昨日の事はそれこそ真夏の夢か幻かって気がしてきた」

「落ち着いた？では特製のレモンスカッシュをごちそうしようか、もちろんユカちゃんの買ってきてくれたリムーのレモンでね」

「わっ、ありがとう」

マスターが棚からグラスを取ろうとした瞬間、店のドアの鈴が少し乱暴にカランカランと音をたてた。

「いらっしゃいませ」

「えっ、マスター　ちがう、地震！」

店全体が小刻みに揺れ、やがてその揺れは大きな波に変わった。棚のガラスが一度に床に落ち甲高い音を立ててガラスのしぶきが跳ぶ。カウンターの水槽は波を打ち、中のグッピーとネオンテトラがあわてた様子で水中を泳ぎ回る。

「キャーッ、大きい！」

カウンターを飛び出したマスターがそばにあったバスタオルでユカの頭をくるみ、テーブルの下に抱え込む。30秒にも満たない時間がユカにはとてつもなく長い時間に感じられた。やがて沈黙がよみがえる。

「ユカちゃん、大丈夫かい」

「マスター！地震よ、あの子の言った通りになった！あの子の予言が当たったの！」

「・・・」

「港で積荷が崩れるの、ケガ人がでるわ」

「・・・」

窓の外から不気味な鳴き声のように消防車のサイレン音が飛び込む、救急車の鳴き声も交えて港の方からはスピーカーの声、ホイッスルの音、ただならぬ喧騒が風に乗って舞い上がってくる。

「あの子は言ったの、今日地震が起きるって、港の事故もきつとあの子の予言通り起こってるんだわ」

「どうやらその女の子の話は本当のようだね」

「マスター、ごめん、あたしみんなに会わなくちゃ、みんなに会ってくる！」

「わかった。何かあったらいつでもおいで、これは店の携帯電話、ボタン1つでここにつながるから、しばらく持っていていいよ。それから気が動転した時にはこいつをかじるといい、冷静になれる魔法の薬」

「あつ、エメラルドレモン」

「ありがとマスター、じゃ行ってくる」

ユカは走る、きつとみんなも来ているはずだ。ユカには妙な確信めいたものがあつた。

坂を駆け下り、リムーのある分かれ道を港と反対側に折れる。雑木林を過ぎたところに長く続く石段、駆け上ったところに鳥居が見える。クジラ神社と呼んでいる町の鎮守の境内が5人のいつもの集合場所だった。

（いる！やっぱり誰か来てる！）

「ユカ！待ってたよ」

「しーちゃん、やっぱり来たんだね」

「ええ、1人じゃいられなくて」

「あたしも」

「おー、来たか」

「ウルシ！」

「みんな来ると思ったぜ、教授とロクはオレが電話で呼び出したからもうすぐだ」

ずっと昔はクジラの水揚げ港だったこの町の港を守る神社にはクジラを象った石像が2体。これがクジラ神社と呼ばれる所以である。正式には水島神社という。港を一望できる山の中腹にある境内からも港のあわただしさがはつきりと見える。消防車の赤と救急車の白

が夏の光にはつきりと浮かび上がる。倒れた積荷を持ち上げるためかクレール車のような黄色い車両も見える。

「あつ、2人来たみたい、教授、ロクちゃん、こっち!こっち!」

「予言当たったね」

「あの子の言った通りになったわ」

「じゃ、やっぱり昨日の話は本当ってことか」

「信じられないけど、信じるしかないよ」

「で、どうするの、3日後って言ってたからあさってだよ」

「行くだけ行ってみるってのはどうだ、ほら危険なことはないって言ってたろ」

「何しに行くの」

「夢を叶えてくれるって話だろ、悪い話じゃないじゃん、もしかしたらオレを野球の天才にしてくれるのかも」

「未来を予言したわけだから、超能力者なのかもしれないね」

「どうなの、教授」

「非科学的なことには違いないけど、世界には科学で説明できない力を持つ人が確かに存在する」

「チャンスは1回だけだって言ってたぜ、オレは行く、みんなはどうだ」

「・・・」

「私も話だけは聞いてみる、ダンスが上達する秘訣を教えてくださいませんか」

「僕も超能力と科学のヒントがもらえそうだし」

「頭良くしてくれるかなあ」

「ユカは?」

「えっ、あたしは・・・」

ユカはためらう。いいじゃない、話を聞くだけなら、何をためら

うの。自分にはつきりとした夢がないこと、そして「夢は人に叶えてもらうものじゃない」マスターの言葉もユカの心を揺らしていた。しばらく考えてからユカはようやくくのどの奥から言葉を押し出した。

「う、うん、行くだけ行ってみようかな・・・」

「よし、決まった、あさっての夕方5時、家族が心配しないようサマーキャンプの打ち合わせ、帰宅は7時と全員そろって伝えること」

「10分前には行ってるわ」

「じゃあ、校門の前で」

ロク

6 ロク

「なんだかおかしいことになったね」

「うん、ユカちゃんはまだ将来の夢が見つからないんだっけ」

「そうなの、だからロクちゃんはすごいよ、建築家になる夢、かっこいいよ」

「う、うん」

「あたし、ロクちゃんの建てた家に住んでみたいよ」

「ありがとう」

ユカの家とロクの家は近い。がらくた館をはさんで300メートルほどの距離になる。ユカの家は道を一つ隔ててがらくた館の隣。小さな庭がいつもきれいに手入れされているのはおじいちゃんの仕事。築50年を越える昔ながらの平屋の家は「古い」というよりは大切に住んできた「趣」を感じさせる。

ロクの家はがらくた館を出て西へ3〜4分ほど。石段を降りたところに6戸並んでいる市営住宅の1つだ。

「元気ないね、悩みでもあるんでしょ」

「どうしてみんな勉強できるのかな、志水さんオールAだったんでしょ」

「あっ、それか」

「ぼくもまじめに頑張ってるんだ、授業もちゃんと聞いてるし、毎朝漢字と計算の練習だとしてしてるし、でも5年生から始まった小テスト、あのテストになると全然だめなんだ、一生懸命覚えたことほとんど忘れちゃうんだ」

「うちの学校、テストの点で評価するからしんどいよね、塾でほか

の学校の人に聞いたら毎週小テストなんてしないんだって、評価もうちの学校みたいにAからEなんて細かくつけられたりしなくって『よい』とか『ふつう』とかアバウトらしいし、校長先生を恨んじやう」

「中学に行っても、高校に行ってもこんな感じなのかな」

「もっと厳しいかもね」

「そうかぁ・・・」

「大人になって会社に入っても成績つけられるらしいよ、チチが『ジンジサテイ』がどうのこうのってハハに話してたの聞いたことある」

「勉強できないと夢って叶わないよね」

「うーん、そりゃ必要だとは思うけど、人間の価値って勉強だけじゃないんじゃない、ロクちゃん優しいし、あたし勉強できても冷たい人はいやだもん」

「そうだよね、ちょっと安心した」

「元気だしなよ、しーちゃんやしーちゃん、ロクちゃんはロクちゃん、2人ともとっても素敵だよ」

「ありがと」

「じゃ、あさって」

「うん、また」

小学校6年生、それぞれが大きな夢や希望に胸をふくらませる反面、それぞれがみんな小さな悩みも抱えている。何かの本に書いてあった。「悩みはチョウになって羽ばたくまでにサナギの中でたくわえる養分だ」って。でもそれはチョウになって初めて気づくことなのだ。

「ただいま、ハハ」

「お帰りなさい、ユカ、地震すごかったでしょ」

「港で事故があったみたいなの、クジラ神社から見てきた」

「あら、そう、怪我した人がいなければいいわね」

「今日はチチ遅いの？」

「そうね、忙しいみたいだからユカが寝た後かもね」

「明日の5時にみんなと学校でサマーキャンプの打ち合わせするから、7時にはちゃんと帰ってくるからハハからチチに言っておいてくれる」

「わかったわ、日が長いとはいってもそれ以上は遅くなっちゃだめよ」

「わかった」

「庭のお花に水あげてくれる」

「うん」

「ただいま・・・」

「おかえりなさい、ロクちゃん」

「港はどうだった」

「神社からしか見てないけど消防車とかクレーン車とかいっぱい来てみたいだった、サイレンの音も」

「そう、怖いわね、ようやく片づけたのよ、おやつにする？」

「ううん、ちょっと疲れちゃったから昼寝していい？」

「珍しいわね、おやつもいらさないなんて、あんな大きな地震、生まれてから初めてですものね、驚いたでしょ」

「お母さんも初めて？」

「この町ではね、でも小さい頃住んでいた神戸でもものすごく大きな地震にあったことがあるの、もう終わりかと思ったわ」

「へーえ」

「あつ、昼寝の前にちょっと相談、お父さんと話したんだけど夏休みだけでも塾に行ってみたらって、ほら、商店街の郵便局の横に新しくできたでしょ、進学塾じゃなくて学校でわからないところを教えてくれる補習塾なんですって。チラシを見たけどいいねいに教えてくれそうよ」

「・・・考えとく」

この2日間の出来事が何とはなしにロクの心に重くのしかかる。ユカの言葉になぐさめられはしても、重い気持ちのすべてを振り払うことはできない。「劣等感」という言葉をロクはまだ知らないが、みんなができることが自分にはできない、その気持ちだけはだれよりもロク自身が強く感じていた。「勉強」という魔物が頭を締め付けているようだ。心の疲れはロクに睡魔となって忍び寄った。

(ぼくは、将来建築家になるのが夢です)

(何言っただよ、算数も技術もDでなれるわけないだろ)

(でも、頑張って勉強すればなれるんだ)

(ムリ、ムリ、人には努力で補いきれない才能ってものがあるんだ、お前にはその才能がないのさ、誰が見てもわかるよ)

(そんなことないよ!)

>あ、園田くん、きみの今回の設計ひどかったね、お客さんからクレームが来たよ、書き直してもらおうかとも思ったけど他の者に頼むことにしたから、暮れの「ジンジサテイ」は覚悟してもらわなくて

>申し訳ありません、社長、ぼくにやり直させて下さい、今度はいいものを書きますから、お願いします!<

>いや、もういいよ、君、才能ないみたいだから他の仕事を探したほうがいいんじゃない<

>社長、お願いします・・・<

心の病はしばしば悪夢を誘い出す。誘い出された悪夢は容赦なくロクの心をむしばむ。振り切ろうとしても振り切ることのできないね、ちっこい悪魔は「夢」というキラキラ輝く宝石を一つずつ黒っぽい石コロへと変えていった。

(夢・・・か)

(いやな汗・・・)

(夢がなうなんて・・・そんなことあるはずないよ)

「夢を叶えてあげる」という少女の言葉をロクは頭の中で思い出し
ては繰り返した。

真相（前書き）

真相

7 真相

まだ明るさの十分に残った夏の夕方は、それでも真っ白だった入道雲が微かに赤い色に彩られ、蟬の声の中にはヒグラシの声が紛れ始めている。窓の外をながめていた教授が最初に声をかけた。

「5時10分前、みんなそろったようだね」

「OK!」

「ええ、ちょっと興奮して30分も早く来ちゃったわ」

「ちゃんとサマーキャンプの話って言ってきたよな」

「もちろん、でも7時までは絶対に帰ってこいって」

「私もよ、学校の警備員さんには申請書出しておいたから」

「えっそんなの要るんだ」

「そりゃそうよ、日直の先生だって5時で帰るんだから、黙って使ったら通報ものよ」

「さすがはしーちゃん」

「でも、地震には驚いたね」

「ああ、オレもベッドに寝てグローブ磨いてたんだけど思わず跳び起きたよ」

「港の事故も本当だった?」

「うん、新聞持ってきたの、ほら、見て地方版に事故の事が出てる」

「震度5 水島港で荷崩れ 作業員2人軽傷」

「本当だ、あいつの言った通りだ」

「出まかせが偶然当たったんじゃないとすれば本物の超能力者ってことかしら」

「超能力なんてあるの、教授」

「科学的にはない。でもそれは僕らのものさしで測っているからで、宇宙の中には僕らの知らないものさしがあるかもしれないってこと」
「どういうこと？」

「そうだね、例えば宇宙人、人類はまだ出会ったことがないから信じていない人が多いけど、宇宙に無限の星がある限り、その中で地球にしか生命が誕生しないって考える方が、確率的にもものすごく低いんだ。地球外生命は限りなく無限に近い確率で存在する」

「でも誰も本物に出会ったことないぜ」

「遠すぎて出会えないだけさ、100キロ続く砂漠にテントウ虫とアリが1匹ずついると思えばいい」

「まず出会うことはないな」

「それは僕らがアリの世界のものさしで見てるからだ」

「どういうこと？」

「テントウ虫は空を飛べるんだ」

「あっ、そうか！アリにとっては限りなく不可能に近い確率でも、テントウ虫ならアリの何十倍も確率が高くなるわ、空から探せばいいんだもの」

「教授、すごい、あたし尊敬しちゃう」

「要するに超能力もぼくらが知らないだけであるかもしれないってことだね」

「その通り、ロク、お見事」

「ところでもう5時よ」

「あ、ほんとだ、あの子現れないね」

「やっぱりからかわれたんじゃないか？」

5人は教室の後ろの椅子に腰をかけてあの日のようにお互いに顔を見合わせた。

「私ならさっきからいるわよ」

「えっ」

「あっ」

声の方を振り向くと、教卓の上にはあの時の同じように少女が腰をかけ笑顔で語りかける。

「どっから入ってきたの」

「ドアを開ける音なんか聞こえなかったぞ」

「ま、どこからでもいいじゃない、あなたたちの話聞いてたわ、なかなかおもしろかった」

「きみは、超能力者なの」

「残念ね」

「だって、地震を予言して当てたじゃない」

「でも超能力なんて使えないわ」

「じゃ、どうして地震が起きるのがわかるんだ？」

「さあ、どうしてかしらね？」

「そうか、未来人てことか、君は未来を予言したんじゃない、過去の事を僕らに知らせただけなんだ、そうだろう？」

「まあ、そんなところかしらね」

「じゃ、あたしたちの未来が分かるんだ」

「私が言ったのはあなたたちの夢を叶えてあげるってこと」

「オレ、将来はプロ野球の選手になりたいんだ、力を貸してくれよ、その、未来の技術の詰まったトレーニングマシンとか、そんなのがきつとあるんだろ？」

少女は相変わらず微かな笑みをたたえながら手を差し出した、そこには・・・

「ネックレス？」

「そう、これはあなたたちを未来へ連れていく道具、自分の手で身

に着けたその瞬間未来へ跳ぶわ。そしてその未来はあなたたちの夢見た未来、今、心に描いている夢が必ず実現しているの」

「うそだろ？」

「信じられない・・・」

「信じる信じないは自由、でも地震は起きたわよね」

「未来へ行ったら今の自分は消えちゃうの」

「そうね」

「家族が心配して大騒ぎになるわ」

「ネットレスに触った人以外は、この世界では記憶から消えちゃうから、家族や友達を悲しませることはないわ、それに未来に行けば未来のあなたを今のままの家族が受け入れてくれている、何も淋しいことはないの」

「どう、漆山君、プロ野球の名選手として華やかな人生を送っているのは、志水さん、あなたはミュージカルスターとして舞台の上で輝いてるの、素敵なお話でしょ」

「でも、あなたは どうして 私たちに そんな話をしてくれるの」

「今は言えないわ、話せる日が来るといいけど」

あまりの突飛な話に5人はとまどう、映画かおとぎ話のようなシーンが目の前で展開されている、でもこれは現実なのだ。

「未来へ行ったらもう帰れないの？」

「そうね。でも1回だけ帰るチャンスあげる。あなたたちだって心配でしょ、未来へ行ってからだまされた、帰れないじゃ」

再び5人は顔を見合った、自分から言葉を発するのが怖くて誰かが口を開くのをそれぞれが待っていた。

「そんな大切なことすぐには決められない」

「もっともね、じゃ考える時間をあげる、1時間後に答えを聞かせ

てね、1度きりのチャンスだから自分で決めるのよ」
「あつまた消えた・・・」

選択

8 選択

教室の中を静寂が支配する。

5人とも何かを口にしたくてもできない。驚きはもちろんあろう、しかし心の大半は戸惑いであり迷いである。自分は今2枚のカードを与えられた、「残るか」「行くか」そしてそのカードの1枚は自分の人生を、自分の夢を、自分の手で叶えられる魔法のカードなのだ。そしてそれをわずか1時間という時間の中で決断しなければならぬ緊張とあせり、誰もが自分の心の中で葛藤していた。重い口を最初に開いたのはユカ。

「みんな、どうするの」

「どうするって、どうする？」

「ウルシ！真剣に！」

「めっちゃくちゃ真剣だよ、オレ」

「冷静に考えましょう、未来へ行ったらどうなるの」

「自分の夢が実現している」

「私たち5人はそれぞれどうなってるの、別れ別れになって友達でいられないの？それじゃいやだわ」

「いや、ネックスに触った人以外の記憶から消えるって言ってた、つまり全員が触れば僕らの記憶は消えないはずだ」

「しーちゃんと教授の問答すごく明快・・・お願い続けて。あたしも頭整理する」

「家族は？」

「現代では記憶から消える・・・でも未来では未来の自分を受け入れてくれる」

「私たちの今の記憶は残るの？未来で成功していても今までの思い

出が全てなくなるのはいや」

「それは・・言ってなかった」

「どうするの」

「こんなこと1時間で決めるのなんて無理だよ」

「時間を延ばしましょう」

「えっ、時間を延ばすって、しーちゃんも実は未来人なの」

「ユカ、真剣？それともボケてるのか？」

「真剣に決まってるじゃない」

「あの子はこう言ったわ、自分の手で身につけた瞬間に未来へ跳ぶって、それからネックスレスに触れた人はお互いの記憶が残るって」

「たしかにそう言ってたね」

「ちよつとずるいけど、ひとまず全員が未来へ行くと答える、全員がネックスレスに触るわ、その時点で私たちはお互いの記憶をキープできる。つけるかつかないかはそれからじっくり考えればいいじゃない」

「すごい、しーちゃん」

「でも、そんなときとお見通しじゃないかな、ぼくたちのこの会話だって全部聞かれてるに決まってるよ」

「いいじゃない、もともとが狐に化かされたような話だわ、未来へ行くチャンスがなくなったからって現状に戻るだけじゃない」

考える時間が手に入る、今までのどうしたらいいかわからない混乱の中で、その可能性が示されただけで全員の心に安堵が宿った。

（さすがはしーちゃんだ。あたしだけならうろたえてきつと何も行動を起こさないまま終わってた）

「じゃ、そういうことでいい？」

「了解」

時計の針がタイムリミットを示す。

全員が一斉に腕時計に目を落とした瞬間・・・

少女は三たび、同じように姿を現した。5人は今度こそ現れる瞬間を見ようと構えていたが一瞬の出来事にそれは叶わなかった。

「どう、答えは出たかしら」

「私たち未来へ行きます」

「そう、わかったわ、それじゃ一人ずつネックレスを渡すわね」

しーちゃん、ウルシ、教授、ロク、そしてユカ、1人ずつその手にネックレスが手渡される。銀色のチェーンに1ミリ程度であろうか、ガーネットのような真っ赤な宝石をあしらったペンダントがついている、見た目はなんてことのないネックレスだ、重さはほとんど感じない。

「確かに渡したわ、上手い作戦だったわね」

「やっぱりわかってたの？」

「もちろんよ」

「じゃ、何で？」

「これであなたたちの記憶は消えない、でも実はここからが本当の決断よ」

「えっ」

「あなたたちは1度ネックレスを手にしてしまった、使うか使わないかはあなたたちの自由、でもどう、誰かが使って誰かが使わなかったら」

「あっ」

「そう、どちらにしても友達を失うことになる。記憶は消えないからね。仲良し5人組がばらばらになるかもしれないのよ」

「そうか、しまった！そこまでは考えなかった！お前性格悪すぎ」

「チャンスの裏側には必ずリスクが存在するわ、覚えておくといい

わね」

「そんなこと・・・」

「私はこれで消えようと思うんだけど何か聞きたいことはある？」

「ありすぎて何から聞いたらいいのか・・・」

「大事なことだけ伝えておくわね」

「大事な・・・こと」

「ネックレスは今から24時間だけ力を持つ。それを過ぎればただのオモチャ。その瞬間に私の事もすべて忘れるから」

「24時間・・・」

「それから、ここにいる5人以外の誰かに1人でもこのことを話したら、その瞬間に全員のネックレスは効力を失うわ」

「あなたたちはこれから24時間きつと苦しみ迷い続けるわ、人生はとても重いもの、自分の人生と向き合って、自分の意思で選ばなければいけないの」

「・・・」

「そうそう、1つ大切なことを忘れてたわ、はいこれ」

「何？」

「指輪？」

「ネックレスを使って未来に行った後、帰りたくなったらその指輪をはめるといいわ、1度だけ帰ってこられるって約束したものね。もっとも帰るってことはたった1度のチャンスをつかんだ未来での成功を捨ててくることになるけど」

「ねっもつと聞きたいことがある、いっぱい」

「残念ながらここまで、ほら7時までに帰らないと家族が心配するわ、さようなら」

「待って!・・・」

再び沈黙が教室を包んだ、全員があまりにも重い宿題を抱えて家路につかねばならない。

「明日の正午、場所は神社・・・」

ウルシの声が静かに今日の終わりを告げた。

迷い

9 迷い

「行く」か「とどまる」か

「使う」か「使わない」か

5人は人生という長い道の分岐点にいきなり連れてこられた。

山の頂へと続く険しい山道を登ることが人生ならば、一方の道を選べばそこには真新しいロープウェイが待っている。それは何の苦労もなく快適に頂上に連れていってくれる。そして、頂上は間違いなく澄み渡った青空なのだ。そこから眼下の景色を眺めるのはさぞかし気持ちのいいことだろう。

もう一方の道は見るからにくねくねと折れ曲がり先が見えない。途中で雷に遭うこともあれば、足を滑らせて転び傷を負うこともあるかもしれない、行き先を見失い暗い森を淋しくさ迷うこともあるだろう。しかも、苦勞してようやくたどり着いた山頂が晴れているとは限らないのだ。

だれだって、楽な道を選びたくなる、だれだって晴れた頂に立ちたい。

（みんなはどうするんだろう）

（あたしとちがってみんな夢を持ってる、もしあたしだけが残ることになったら・・・あたしはひとりぼっち・・・）

ユカは迷う。自分もみんなと同じ道を選べば・

でも、何か違う気がする。「夢は人から与えられるものじゃない」マスターの言葉がずっと心に引っかかっている。自分にはまだはつきりとした夢がないから、それはきれいな事なの？ いや、やっぱり違う、山に登る途中で汗をぬぐいながら飲む水筒の水のおいしさ、道端にふと見つけた花の美しさ、そして何よりも頂上にたどり着いた時の言葉では言い表せない喜び、まだ短い人生の中でユカにもそんな体験があった。たとえ天気が悪くても、そこで広げて口にしたおにぎりがどれだけ美味しかったか。

選べる道は1つ。

「全員そろったな、いい場所を見つけた。神社の集会所のカギが壊れてる、あの中なら落ち着いて話せる」

木造の古い集会所は扉を閉めても蝉時雨が微かに忍び込む、曇りガラスでは防ぎきれない夏の日差しが部屋の中を白く照らしている。湿気がないせいか、思いのほか暑さを感じないのが救いだ。

「夕べはほとんど眠れなかったわ」

「志水さんも？ 僕も同じだ、こんな気持ちで過ごした夜は生まれてから始めてだ」

「オレもだよ、で、みんなどうするんだ」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「私、悩んだ、本当に苦しかった。でも、決められない、みんなの気持ちを確かめないと・・・」

「オレも考えた、生まれてからこんなに考えたことないくらい考え

た」

「で、結論は」

「みんな一緒なら・・・行ってもいいかなって・・・」

「えっ」

「だって、夢を手にするんだろ、それに家族を悲しませることもないし、未来では今までと同じように家族だし、それに、ほらみんなとだって一緒にいられる、ただ。単に大人になってるだけかなって」

「私も、みんなと一緒になら・・・どうしてもミュージカルの舞台に立つてみたい」

「僕も悩んだ、でも一度は帰ってくるチャンスがあるんだ、ならば、自分の未来を見てみたい・・・そんな気持ちも強くなってる」

「教授・・・」

「そうだよ、オレたちは帰るチャンスを持ってるんだ、行ってみない手はないぜ」

「そうよね、私たち、今世界で誰にもできない体験をできるかもしれない」

「うん」

「なんだか方向が見えてきたみたいだね」

曇りガラスの向こうでは緑の木々が風に揺れているのがわかる、
蝉時雨の音が静かな空間に5人の決意を後押しするかのようにひと
きわ大きく響き渡った。

「ね、ちょっと待って」

「何？ユカ」

「あたしは・・・残る」

「えっ？」

「あたしは行かない！」

「あたしもずっと考えた、一晩中考えたの、あたしはみんなと違っ

てはつきりとした夢がないからかもしれない、でもなんか違うと思うの」

「何がどう違うんだい？」

教授が戸惑いながらも、努めて冷静に尋ねる。

「夢って、誰かに『はい』って渡されて叶えるものなの？何の苦勞もしないで手に入れるものなの？そんなの夢でも何でもないよ。もし、未来へ行ってウルシがプロ野球の有名選手だとしても、しーちやんがミュージカルスターだとしても、教授がノーベル賞を獲るような学者だとしても、あたし、喜べない！今までとおなじようにみんなと話せない！そんなのさびしいよ！！」

「ユカ・・・」

「夢は・・・夢は・・・大変だけど叶えるまでが大切なんだよ、頑張るから叶ったときにきつと嬉しいんだと思う、できなかった時には悔しいんだと思う、だから涙も出るんだよ、みんな！目を覚まそうよ！！」

ユカは涙を止められなかった。自分は今もしかすると仲間たちの夢をつぶそうとしているのかもしれない、自分のわがままなのかもしれない、でもあふれ出る言葉は自分の意思とは関係なしに次から次へと胸の中から湧き出してくる。

「あたしもちゃんと夢を見つける！みんなと同じように夢を見つけて頑張る！だからお願い、一緒に頑張ろうよ！くじけそうになったらあたしを助けて！」

「・・・」

「・・・」

「そうだよな・・・確かに努力しないでいい思いしたってつまないよな」

「ウルシ・・・」

ユカが涙をぬぐいながらウルシを見つめた。

「ユカ、ごめん、ありがと、私目が覚めたわ、目の前のおいしい未来に手を伸ばそうなんて、なんか恥ずかしいな」

「しーちゃん」

「僕も考えさせられました、篠宮さん、感謝します」

「教授・・・」

「みんな、ごめん、あたし、みんなの夢の邪魔をしようとしてるんじゃないの・・・」

ユカは再び泣きじゃくりながらくずれおちかける、しーちゃんがしっかりとその体を受け止めてささやいた。

「ユカ、大丈夫よ、だれもユカが私たちの夢を邪魔しようだなんて思っていないから」

「もう泣くな、お前が正しい」

「篠宮さん、よく言ってくれました」

それぞれの胸に安堵が芽生えかけた時、その芽は突然冷たい水をあびせられ凍りついた。

「ぼ、ぼくは、行くよ」

決断

10 決断

「えっ」

「ロクちゃん・・・」

「ロク、今何て言った？」

ロクは落ち少し興奮したように顔を赤らめ、しかし確かな口調で言い放った。

「ぼくは未来へ行く」

「ロクちゃん、どうして？ 1人で行ったら離れ離れになっちゃうんだよ」

ユカが確認するようにロクを問い詰める。

「そうだよ、僕たち今、篠宮さんの言葉ではっきりわかったんだ、自分たちで努力して夢を叶えようって」

しばらくの沈黙の後、ロクは今までに見たことがないような厳しい目で4人の顔を順番に見つめた。

「みんなはいいいよ、志水さんだってウルシだって、教授だって、きつと努力すれば夢が叶う、でもぼくは違う、ぼくはだめさ、いくら頑張ってもみんなのようにはなれない」

しーちゃんは必死に説得を試みる。

「園田くん、そんなことない、園田くんだって頑張ればできるわ」

「ぼくだって頑張ってる、自分でできることは頑張ってるんだ、でも、結果はオールDさ、才能のあるみんなにぼくの気持なんかかわからないよ!」

「ロク、考え直せ、お前がいなくなるのなんて耐えられないよ、サマーキャンプはどうする、みんなで最後に優勝するんだろ」

「ぼくは決めたんだ、1人になってもいい、今までずっと悔しい思いをしてた。だからうんと才能のある大人になって、自分の思うように生きる、お母さんに立派な家を建ててあげるんだ」

「ロク!」

「ロクちゃん!」

凍りついた空気は嵐のように小さな小屋の中を吹き荒れていた。1度は溶けかけた固い氷が今や大きな塊となってロクと4人の間に氷河のように横たわっている。もう誰も溶かすことはできない。

「ロク、もう1度だけ言う、一緒にいよう」

「ウルシだってついさっきまで行く気満々だったじゃないか、説得力ないよ」

「そ、それは・・みんなと一緒にいくならって考えたんだ、1人なら行こうとは思わない」

「それこそ、中途半端じゃないか、みんなで行くとか、行ってみて帰るとか、どれもこれもウルシはどっちに転んでもいいって考えるからだよ、でもぼくはわかったんだ、ぼくが夢を叶えるにはこのチャンスをものにするしかないって、だから、ぼくは・・1人でも行く!」

「ロクちゃん、本当に行っちゃうの？考え直せないの」

「うん、ユカちゃん、今までいろいろと相談に乗ってくれてありがたい」

「ロクちゃん・・・」

今のロクを止められないことを4人は悟った、と同時に今まで時には自分たちに愚痴をこぼしていたロクがここまで真剣に悩んでしたことも。

ロクは小さな部屋をみんなから遠ざかるように1歩1歩後ずさる。そして、最後の1歩である右足を壁にぶつけたと同時に、ポケットからネックレスを取り出す。それからひとつ大きな深呼吸をした後ゆっくりと自らの手でそれを首につけた。

「みんな、さようなら」

瞬間、部屋の中が暗闇に飲み込まれる、そして回る、回る、回る。まるで宇宙空間を疾走するジェットコースターのように、それはおそらく数秒間の出来事、でもユカたちにはその何倍の時間にも感じられた。やがて、再び静寂が訪れる。

「・・・」

「ロクちゃん、行っちゃった・・・」

「私、知らなかった、園田くんがあんなに悩んでたなんて、それなのにオールA取ったとか言って、どれだけ園田くんの気持ちを傷つけたか・・・ごめんなさい」

「泣かないで、志水さん、僕らなんでも本気で言い合えるから仲間だったんじゃないか」

「そうだ、気にすることないさ」

「あつ、何あれ？」

部屋の少し高い天井から舞い降りてくるものがある、それはボタ
ン雪のようにゆっくりと畳の上に落ちた。

「見て、ロクの事が書いてある！」

「み、未来の新聞だ・・・」

> 園田 禄氏 世界建築コンペ優勝 <

「やっぱりあいつの話は本当だったんだ」

「さびしいけど、ロクちゃんのためにはよかったのかも・・・」

「ロクは、自分で自分の人生を選んだんだ」

「・・・」

「あら、もう1枚ある」

「えっ、大変」

> 建築家 園田氏 狙撃され重体 <

「何だって！」

『世界的に有名な建築家、園田禄氏が講演先の海外で何者かに狙
撃された。仕事上でライバル関係に当たる外国企業が関与か、園田
氏は意識不明の重体で・・・』

「ロク！」

「こんなことってあるのかよ！」

「ロクちゃんが死んじゃう！」

「園田くん！」

「思わぬ展開になったわね」

「あっお前、いつの間に」

「結局園田くんが一番勇気があったってことかしら」

「あなた、私たちをだましたのね、この記事は何、園田くんがこんなひどい目に遭うなんて一言も言わなかったじゃない」

「だましてなんかいいわ。私はあなたたちの夢を叶えてあげると言っただけ。園田くんは夢を叶えたわ、成功したのよ。でもそのあとどうなるかは自分次第、成功したあとのことまで私は話した？」

「サギだぜ、そんなの」

「チャンスの裏側にはリスクが存在する、これは教えたわね、もう1つ教えてあげましょう、計画通りに進む人生なんてないの、自分の人生は自分で責任を持つしかない。園田くんは自分で未来へ行く道を選んだ、選んだ以上その結果も自分で責任を負うしかないのよ」

「そんな・・・」

「あなたたちもよく考えて道を選ぶのね、少なくとも今のあなたたちには選ぶ権利と自由があるんだから。それさえなかった時代があったこと、社会科で習ったでしょ」

「・・・」

「このあと、どうするのかしら、ま、私が出る幕じゃないけど・・・さよなら」

覚悟

11 覚悟

真夏の乾いた空気が蟬時雨の声とともにかすかに忍び込む。沈黙が再び部屋の中を支配する。誰もが言葉を失う中、ユカも戸惑い続けていた。

（あたしたち、もう後戻りができないところにきたのかもしれない・・）

教授が重い口を開く。

「とんでもないことになったようだね」

「どうしたらいいのあたしたち」

「もう一度冷静に考えましょう」

しーちゃんが自分自身を落ち着かせるかのようにゆっくりとみんなを見つめて言った。

「ああ、オレたちはサマーキャンプの計画を練ってた、そこへあいつが現れた」

「そして、夢を叶えてくれるといった」 教授が確認する。

「どうしてオレたちはそんなこと信じたか」

「地震を予言したからだわ」 ユカの眼が大きく見開く。

「おれたちはあいつを信じて未来の成功を手に入れようと考えた」
「でもユカが最後のところで止めてくれたわ」

「でも、ロクは止められなかった」

教授の言葉に一瞬の沈黙が・・・

「オレたちははっきりわかったんだ、くさいセリフだけど夢は自分の手で叶えるものなんだって」

「何となく見えてきたね、僕たちにできることを僕たちの手で努力すればいい、いや、努力しなくちゃいけない」

「そうだけど、それは今までと同じことじゃない」

「うん、でも篠宮さん、僕らがしなくちゃいけない努力ははっきりしてる」

「わかった！ロクちゃんを連れ戻すこと！」

「そう、何が何でもロクを助けるんだ」

「うん！」

「で、オレたちどうすればいい？」

「答えは一つ、僕たちも未来へ跳ぶ」

「えっ、それは・・・」

ユカが教授の顔を見て戸惑いの表情を見せる。

「篠宮さん、勘違いしないで、僕らが未来へ行くのは夢を手にするためじゃない、ロクを救うためだ、だから・・・必ず帰ってくる」

「そうだ、まだネックスに触れてから24時間経ってない、今ならまだ間に合うぜ」

「そうだわ、そして帰ってくるチャンスも1度だけ残ってる」
「・・・」

ユカはまだ不安を拭いきれない。

「でも、行った先でどんなことが待ってるかわかんないよ、お互いのことだって覚えてるかどうかな・」

「うん、でもぼくらにできることがほかにあるかい？このままロクがないまま毎日を過ごしていけるか」

「そんなの絶対いや！」

「じゃ、覚悟するしかない、そしてお互いを信じるんだ、4人が信じあって、1人1人ができる限りの努力をしてロクを連れ戻す」

「みんな、どう？」

教授が決断を迫った。そして、この決断には大きな覚悟が必要だ。

「・・・」

「私、やるわ、園田くんが悩んでいたのに気付かなかった私がいけなかったの」

「さすが志水さんだ、おれも行くぜ、ユカは」

「あたしも・・行く」

「よし、決まりだ」

「よし、みんな手を出せ」

4人は両手を出し合い、お互いの手のぬくもりを感じあう、1人では持ちきれなかった勇気が少しずつ4人の手を伝わりふくらんでいくのを感じた。

「ねえ、未来に行ってもあたしたちわかりあえるよね」

ユカがさがるような目で教授を見つめた。

「そ、それは行ってみないとわからない、記憶は残ると言ってたけどそれは現在の事だから」

「全員、同じ場所に傷をつけましょ、きっと何年たっても忘れないわ」

「こわっ！」

「志水さんの気持ちはわかるけど女の子に傷をつけるなんてできないよ」

「あたしから提案」

「何、ユカ」

「気休めかもしれないけど、おまじない、これ」

「レモン？」

「うん、リムーでもらったエメラルドレモン、気持ちが動揺した時に冷静になれる魔法の薬なんだって」

「1個しかないの？」

「うん、だから・・・」

「よし、順番にかじろう」

「いいね、じゃおれからだ」

4人は順番にゆっくりとレモンをかじる。

「すっぺー」

「次は私ね・・・きゃー刺激的」

「おお、これは・・・」

「最後はユカよ」

ユカは全ての想いをこめてレモンをかじる、ちいさなしぶきが顔の前ではじけるのがはつきり見えた。

「うー、こりやたまりません」

「ユカの顔おばあちゃん」

「失礼ね」

4人の笑い声が部屋の中に響く。

（何だか久しぶりに心から笑った気がする）ユカはうれしかった、心の底では本当は怖かったんだ、でもみんなとなら勇気を振り絞れ

る、そんな気がした。

「最後にもう一度確認しよう」

「確認で、何を、教授？」

「これから先はどうなるか、わからない、みんな一緒に行動できるのか、それともバラバラになるのか」

「うん」

「たとえば、1人になろうとも目的はただ1つ」

「園田くんを救うこと」

「そうだ、もしかすると全員で帰れないかもしれない、たとえば、そんな場面に出くわしてもこの目的を忘れない、ロクはこのままだと死んでしまうかもしれないんだ、つらくてもロクの命を助ける、それだけはみんなで心に誓おう」

「よし、わかった」

「うん」

「ええ、わかったわ」

「よし、準備はいい、みんなネックレスを出して」

「僕が3つ数える、3つ目でネックレスを付けるんだ、いいね」

「OK」

「みんな目をつぶって・・・」

「1・・・」

「2・・・」

「3！！」

未来

12 未来

「ユカ、起きなさい、時間よ」

長いまどろみから覚めたようなぼんやりとした感覚、それは風邪をひいて熱を出し、ずっとふとんにくるまれていたあと、寝汗とともに回復した体を久しぶりに起こす。そんな感覚にも似ていた。

「ユカ、7時よ」

「ハ、ハハ？」

目を開けるとそこには見慣れた顔、でもちよつとした違和感、白髪混じりの髪と少しやせたように思える「ハハ」の顔は優しい面持ちには変わらずとも明らかに時の流れを映しだしていた。

（み、未来へ来たんだ・・・）

「大事な入社式に遅れたらどうするの」

「入社式？」

「何、寝ぼけてるの、夢だったアナウンサーの記念すべき初日でしょ、しっかりおめかしして行きなさい」

「アナウンサー？ あたしが？」

「ほんとに大丈夫、大学院に行つてまで手に入れた夢でしょ、さ、早く支度しなさい」

（あたしは、未来に来たんだ、本当に来たんだ。そして記憶は・・・昔のまま・・・）

（えい、落ち着け、冷静にならずに）

（ロクちゃんを助ける、記憶が昔のままならきつとできる、でも今の事がわからない・・・）

（でもやるしかない、覚悟してきたんだもの）

ユカは混乱する頭を整理しながら、ベッドから体を起こす、そして顔を洗った後はハハに言われるままに着替えを済ませた。生まれてこの方着たこともないスーツに身を包み、ユカは初めて未来の自分を鏡に映す。

（これが、あたし・・・）

そこには紛れもなく12年後の篠宮由香の姿があった。

（自分じゃないみたい・・・）

（あっネックレス）

ユカの首にはあの時のガーネットのネックレス。

「ゆ、指輪は！」

「あった」

机の上のガラスの皿の上にあった指輪をユカは鞆の中のポーチに大事にしまった。

（これだけは・・・常に持ってなくちゃ）

「おめでとう、ユカ」

「あっ、チチ」

「今日からテレビでユカを見られると思うと楽しみでいつもより早く起きちゃったわい」

「何言ってるのおじいちゃん、入社1日目からすぐにテレビに出る

わけないでしょ」

「じいちゃん、昔とあんまり変わんない」

ユカは未来へ来て初めてクスツと笑った。

「何なの昔って、さっ朝食にしましょう」

「ね、入社式の案内は？」

「夕べカバンにしまったたじゃない、10時からでしょ」

「あっあった」

『テレビ瀬戸内 入社式 於 本社ビル 9時半までにご来場ください』

（とにかく、なるようにしかない、行くしかないよね、でもよかった・地元で。知らない場所だったらロクちゃんを探すどころじゃないもの）

（あたし、できる、順応性あるんだから、わからなかったら何でも聞いちゃえばいい、ロクちゃんを助けるためなら何だってやる）

ユカは自分で自分を叱咤するようにほったをつねってみた。頬に感じた痛みは今が夢ではなく確かに現実だということをはっきりと物語っていた。

「じゃ、行ってきます」

「行ってらっしゃい、気をつけてね、今晚はお祝いにあなたの好きなトマトシチューで待ってるわ」

「ありがと、ハハ」

「ユカ、がんばれよー」

「じいちゃん！うん、行ってきまーす」

小さな庭を抜け、昔ながらの格子戸をくぐりユカは朝日の中を飛び出す。

「あつ、がらくた館！」

家を出たユカの目に飛び込んできたのは「がらくた館」だ。

（まだあつたんだ、よかった・・・マスター元気かな、まだ開店前か・・・）

坂道を港のそばの駅に向けて早足で歩くと分かれ道にはやはり見慣れた店が。

「リムーもある！あつおじさん！」

「サラーム ユカちゃん」

「サラーム おじさん ちょっと老けたね」

「何だい、昨日会ったばかりじゃない、今日は入社式だっけ」

「うん、何だかわからないけどそうみたい」

「ほれ、お祝い、持っておいで」

「あつエメラルドレモン」

「緊張した時に紅茶に入れて飲むといい、リラックスすること間違いなし」

「ありがと、感謝」

手を振るおじさんを背中にユカは眼下の町を眺める。そこには昔と変わらぬ町並、青い海と緑の小島、連絡船が忙しそうに行き交うミニチュアのような光景が広がる。ユカは心から安堵する。

（あたしの町はずっと変わっていないんだ）

この景色がこれからめぐり会うであろう予想もしないさまざまな出来事に対する不安を打ち消してくれる何よりの強い味方のような気がした。

（みんなはどうしたんだろう・・・）

（会場までは30分ぐらい、まだ時間がある、どうしたらいい？）

「そうだ、携帯だ！」

ユカは思わず声に出した。

（きっと携帯にみんなの連絡先があるはず）

ユカは鞆の中に携帯を探す。

手の平に隠れるほどの小さくてお洒落なガラスの板のようなものが、目に入る。

「これかな」

手に持った瞬間に透明なガラス板は一瞬にして通信機のような映像を表面に映しだした。

「ひえ！進化してる 薄いし軽いし」

「どうやって使うんだろ」

「複雑でわかんないよ、もうこうなったらヤケだ」

「志水佳澄！」

ユカはしーちゃんの名前を携帯に向けて呼んでみた。

「あっ、出てきた！さすが未来」

ガラスの表面には名前と大人になったしーちゃんの顔が立体的に浮かび上がった。

「しーちゃん、すごい！大人っぽい」

「えーと、次は・・・内山京司！」

教授の顔が同じように浮かび上がる。

「教授だ。あんまり変わってない、メガネがちょっと派手じゃない、教授のイメージとちよつと合わないかな」

「そして最後は・・・漆山 航！」

ユカはウルシの名前を呼んだ。

「あれっ？」

「名前間違えたっけ」

「もう一度、漆山 航！！」

ユカは一度目よりも大きめの声で携帯に向かってウルシの名前を呼んだ。しかし、時間がたってもウルシの顔が浮かび上がることも、名前が現れることもなかった。

「どうして？ウルシが出てこない・・・」

はじまり

13 はじまり

「もしもし、しーちゃん」

「もしもし」

「しーちゃん、あたし、ユカ」

「ユカ？連絡待ってたわ。さっき教授からも電話があったの」

「記憶、もとのままだったね」

「そうね、ユカは何してるの」

「聞いて、あたしテレビ局のアナウンサーになってた、しーちゃん
は」

「うん、劇団に入って、夏の公演の主役よ、来週から舞台稽古が始まるらしい、日記に書いてあったわ、自分の日記を見て知るなんて何だか変な気持ち」

「あたしもこれから入社式に行くところ」

「そう、とにかくみんなで会いましょう。今日はお互い無理ね。明日は土曜日だから10時に神社で、教授もOKだって」

「うん、わかった、あっウルシは」

「それが携帯に連絡先がないの、ユカは」

「あたしも、どうして？」

「わからない、でも仕方ないわ、とりあえず3人で」

「了解、今日1日うまくやってね」

「ええ、ユカもね、自分自身の役をやるなんてミュージカルでもめったにないわ、演技の練習と思って頑張ってみる」

「じゃ、そろそろ行かないと遅刻だから」

「それじゃ」

（よかった）

ユカはひとまず安堵した。町並も家族も昔と変わらずに自分を迎えてくれた。あの子の言った通りだった。しかし、現実とは大きな隔たりがある。本来なら輝かしい未来での新しい毎日のスタート、胸をときめかせる人生の幕開けだろう。けれども24歳の体に12歳の心、そこにはとまどいと不安がよぎる。

何よりも4人にはロクを救うという大きな宿題があった。ユカは気を引き締め直し駅への坂道を駆け下りた。

目の前には10階建てぐらいだろうか、大きなビルの入り口にひっきりなしに多くの人々が足早に吸い込まれていく。

「おはようございます、新入社員の篠宮です」

「おはよう。こりゃ偶然だ、アナウンス部の久本です、面接の時に会ったね、覚えてる？」

「あ、いえ・・・緊張してたんで」

「そうだな、こちらへどうぞ、一緒に行こう」

「あの、入社式は・・・」

「ああ、詳しいことは知らせてなかったね、入社式といっても会社全体でやるような儀式はないんだ。なにしろ地方の小さなテレビ局だから忙しくてね、それぞれの部署で独自に新入社員を迎えるというわけだ」

「そうなんですか」

「アナウンス部の新入社員は君ひとり、歓迎するよ」

「えっあたしひとりだけ？」

「そう、地方局といえども倍率は100倍だぞ、よく頑張ったな」

「ひ、ひゃくばい！」

「応募の時にわかってただろ」

「あ・・・はい」

「ここだ、さ、入って」

「はい」

「部長、新人アナウンサーの篠宮さんです」

「し、篠宮です、よろしくお願いします」

「峰岸です、ようこそアナウンス部へ」

「女性の部長さんなんですね」

「めずらしい？」

「い、いえ、かっこいいですね」

「あら、ありがと、じゃ入社式といきましようか」

小さな部屋のブラインドがずっと上がるととたんにまぶしいまだ若い朝の光があたりを温かく包みこんだ。

「では、あらためましてようこそテレビ瀬戸内アナウンス部へ、じやみんな自己紹介」

「アナウンス部次長の久本だ、よろしく」

「原田です、6年目で朝のニュースを担当しています」

「山梨といいます、僕は4年目、しばらくの間はぼくについて勉強してもらおうでよろしく」

「あと一人は今仕事中、お昼のニュースの打ち合わせ、ほらあそこを見て、スタジオの中にいるわ」

ガラス越しのスタジオの中からヘッドホンをかけたかわいらしい女性が手を振る。マイクを通して声が飛んで来る。

「久保木恵です、よろしくね」

「篠宮由香です、よろしくお願いします」

「以上。あなたを含めた6人で全員よ」

「少なくて驚いたろ、この春に1人結婚退職した子がいて君がその後任だ」

「大きなテレビ局なら何カ月もかけて一人前に育てるのでしょうか、ここでは即戦力になってもらうから覚悟してね。今日はこのあと局を案内して一通りの事を教えます。分厚いマニュアルをプレゼントするからこの土日ですべて覚えて来ることに。来週からは研修を兼ねて山梨君の取材に同行してもらおうから、仕事を覚えていってね、いいかな」

「は、はい！」

「よろしい、がんばってね」

心臓の鼓動が指先まで伝わってくる。あたしがアナウンサーに・・・12歳のあたしはまだ夢も持てず、はっきりとした夢を描いて頑張る仲間たちから取り残された気がしていた。

（これがあたしの未来・・ううん、現在・・）

何もかもが新しく、何もかもが驚き、時を越えていきなり飛びこんでしまった大人の世界にユカは戸惑う。

（これが大人の世界なんだ、挨拶1つでもテキパキとして、みんななんて素敵なんだろう、なんて輝いてるんだろう）

1日があつという間に過ぎる、こんなに早く流れる時間をユカは初めて体験した。見学するスタジオも、そこで生き生き働く人々の姿も、峰岸部長から聞く話のひとつひとつも、全てが新鮮な驚きに満ちていた。

「さっこれで一通りの事は教えたわよ、何か質問はある？」

「い、いえ、何から聞いていいのか・・」

「はは、そりゃそうね、わからないことは聞く、初めは何を聞いても恥ずかしいわ、そのかわり1度覚えたことは忘れませんでしたじゃ

許されない、それが仕事の世界よ、わかった」

「はい」

「じゃ、7時だし今日はこれで帰っていいわ、はい、これは今日の話をさらに詳しく書いたマニュアル、月曜日までの宿題だから、しっかり覚えて月曜日に今日と同じ時間に来てちょうだい」

「わかりました、さようなら、じゃなかった 失礼します」

再会

14 再会

長い石段を登る、少し登っては振り返り確かめるように眼下の町並みを眺める、次第に開けていく視界、石段を登りきった鳥居にもたれながらユカは大きく1つ深呼吸をした。

「ユカ」

背後から聞き覚えのある声がした。

「しーちゃん！」

「ユカ素敵、12年ぶりなのかしら、それとも2日ぶりなのかしら」

「しーちゃんもまるで別人、でも声は変わってないね」

「お待たせ」

「教授！」

「何だか自分じゃないみたいで照れくさいんだけど」

「大きくなったね、見上げるくらい」

「派手なメガネ、ちよっと似合っていないよ」

「今の流行らしいよ」

「教授の未来はどうだったの」

「しーちゃんがうれしそうに笑顔で問いかける。」

「うん、大学院で宇宙工学の研究をしている、子供の頃の、いや、

二日前の僕が思い描いていた通りの未来になってたよ」

「ウルシとは連絡取れた？」

「いや、携帯に連絡先はないし、こっちに連絡も無い」

「何でなんだろう、あたしたちはこうして会えたのに」

ユカが首をかしげてみせた。

「わからないわ」

「連絡先がないと知ってからすぐに調べてみたんだ、僕たちが夢を

叶えたようにウルシもプロ野球の選手としてきつと成功してるはずだ、ネット上で検索すればきつとわかると思ってね」

「で、どうだった？」

「すぐに出てきたよ」

教授は取り出した携帯端末のガラス盤の1箇所を軽く指でたたいた後、そこに向けて呼びかけた。

「ウルシヤマ ワタル」

硝子盤はしばらくすると画面に映像を映し出した。

「声で簡単に検索できるんだ、何万件とヒットしたけどトップに出てきたよ、ほら」

教授がガラスのスクリーンを2人に見せると、精悍とした顔つきのピッチャーがダイナミックな投球フォームで目にも留まらぬ速球を投げ込む姿が立体的に浮かび上がった。

「ウルシだわ、なんか、かっこいい」

「ホント、でも間違いなくウルシ」

《漆山航 24歳 プロ野球山陽ドルフィンズ 投手 私立聖海学院高校から聖海大学卒業後、ドラフト1位指名にて入団、持ち前の速球と勝負度胸のよさで1年目から活躍、14勝を挙げ新人王を獲得、2年目も15勝を挙げて、長年低迷が続けてきたドルフィンズを2位へ躍進させる原動力となる、入団3年目の今年は念願の優勝に向けて更なる活躍が期待される》

DJ風のナレーションが読み上げられた後、立体映像はウルシの

投球フォームを映し出し、続いて自己PRが流れた。

「ドルフィンズの漆山航です、今年は優勝目指して投げまくります、みなさん応援よろしくお願いします！」

ウルシの笑顔を最後に映像は終わり、ウルシの顔もスクリーンの中に戻り動きを止めた。

「カッコイイ！」

ユカが指を鳴らしてみせた。

「やっぱり夢の通りね」

「うん、ドルフィンズはずっと弱かったから全国的にはまだまだらしいけど、地元じゃ知らない人はいないくらいのスターだ」

「すごいわ」

「それから、志水さん、もうひとついい物を見つけたんだ」

「何？」

「ほら、これさ」

《新春特番 ドルフィンズ期待のエース漆山航選手、新進気鋭の建築家園田祿氏、地元出身の若手2人にロングインタビュー》

「ロクちゃんだ！」

「2人は地元出身の期待の若手として今年のお正月にインタビューを交えて対談してるんだ」

「じゃ、ロクちゃんと会うのも簡単ね」

「でも、どうしてウルシは連絡してこないのかしら」

「うん、そこがわからないんだ」

「それが謎よね、教授でもわからないなんて」

「僕らの記憶はこうして残ってるし、たとえば何かの理由で携帯に連絡先が無いとしても、何らかの方法で僕らを探さないはずは無い」

「有名人だしきつと連絡したくても出来ないんじゃないのかしら」
しーちゃんがしごくもつともな理由を口にした。

「それは一理ある、でも志水さん、僕たちが未来へ来たと理解した瞬間、最初に思った事は何？」

「うん、確かに最初は驚いてしばらくは混乱したんだけど、とにかくみんなに会いたかった、話したかった」

「僕も同じだ」

「私も！」

ユカが勢いよく手を挙げる。

教授はしーちゃんを見ながら話を続けた。

「だからウルシが連絡してこないわけはないんだ、絶対に！」

「しばらくは待つしか・・・ないのね」

「それから・・・」

「何？」

「僕はもう1つ大変な事に気がついた」

「えっ大変な事って？」

「志水さん、あの日の新聞のこと覚えてる？」

「あの日って、神社に集まった日？」

「ロクちゃんが撃たれるって記事・・・」

ユカが話に割って入った。

「そう、それで僕らは決心したんだよね、ロクを救うために未来へ行こうって」

「ええ」

「うん」

ユカとしーちゃんはお互いに顔を見合せた後、確かめ合うように同時に返事をした。

「篠宮さんはあの時の新聞の日付、覚えてる？」

「ううん」

「僕はとっさに日付を見た」

「いつだったの？」

「それが・・・9日後の4月11日」

「えっ！ホント」

「うん、年号も日付も僕の頭にはっきりと残ってる」

「つまり、あの・・・教授、どういうことになるの？あたし、頭がこんがらがってわかんなくなっちゃった」

ユカは人差し指を頭の上で渦を描くように回して見せた。

「うん、あの時の新聞記事には前日の朝に日本を発ったと書いてあった、4月10日だ。だから、7日後、つまり来週の土曜日、4月9日までにロクに会って何としてでも引き止めなくちゃならないんだ、外国に行かれたら今の僕らにはどうしようもできない。」

「もし、それができなかったら・・・」

しーちゃんは事の重大さを今あらためて認識したようにつぶやいた。

「ロクは撃たれる・・・」

未来へ跳んでから知らず知らずに浮かれた気持ちになっていた3人の中に再び大きな緊張が芽生えた。

「何からやればいいの」

ようやく事態をのみこんだユカが不安そうな面持ちで教授の眼を見つめた。

「とにかく、僕らはロクに会う、会わなきゃどうにもできない、これから帰ってロクのことをみんなで調べよう、全員で一緒に調べるより効率的だ」

「みんな、メモできるものある？」

「何、しーちゃん」

「いい、これからあたしが言うことをメモして！記録を残すの、次に会うのは今夜の7時、場所はがらくた館で」

「それぐらいいくらあたしでも覚えられるよ」

ユカが不満そうに口をとがらせて見せた、教授はしーちゃんが何

を意図しているのかを理解しゆっくりとなづいた。

「違うのよユカ、よく聞いて、ウルシと連絡がつかなくなっているように、あたしたちもいつどうなるかわからないわ、記憶が失くなったら最後、あたしたちは再会することも、もちろん園田君を助けることもできなくなるの、でもメモを残しておけば万が一記憶を失くしてもこのメモが私たちをつなぐ細い命綱になるかもしれない」

ユカはしーちゃんの言葉をひとつひとつしっかりと聞き取りながら、その重要性を認識し、大きくうなづいてみせた。

「わかった、さすがしーちゃん！」

>/span<

現実

15 現実

カラカラカラン。乾いた鈴の音に続いて外の雨の音が店の中になだれこんできた。

夜になって降り出した雨は時間を追うごとに激しくなり、傘をさしていても意味がないぐらいに夜の街になだれおちる。

「いらっしやい」

「こんばんは、すごい雨、急に降り出して、まいった、まいった」

「ユカちゃん、まだお祝いを言っていなかったね、就職おめでとう」

「ありがとマスター」

「ユカ」

「しーちゃん、教授、2人とも早かったね、あたしが1番近いのに」

「もう長いことお待ちですよ」

「あたし、レモンティー。それから秘密基地借りていい？」

「どうぞ、この雨じゃお客さんも期待できないし、ごゆっくり」

店の奥にある窓辺のテーブル席、>あの頃から秘密基地と呼んでいたスペース、窓をたたく雨の向こうに港のあかりがぼやけて見える。三人が席を移ると同時にユカが教授に問いかけた。

「どうだった、何かわかった？」

「いや、僕はとにかくロクの事を調べまくってみた」

「それで？」

「うん、ロクは高校2年で飛び級して、大学の建築家に入学してる、その2年後の19歳の時に世界でも有数の建築デザインコンペで史上最年少グランプリを獲得していた、正にロクの夢に描いていた通

りの未来だ」

「私も見たわ」

「驚くことじゃ・・ないよね」

「うん、大切なことはどうやってあいつに会えるかってことだ」

「あたしもロクちゃんに関する資料はできる限り目を通した、でも連絡先と言えば大学の代表番号ぐらい、電話してみたけど取り次いでもらうなんてとてもとても・・」

「そうだろ、今のロクは世界的にも有名な建築家だ、簡単に会うなんてことはできないと思った方がいい」

「でも、時間がないよ、1週間以内に会って連れ戻さなくちゃ」

「そうなんだ」

「でもどうやって」

ユカはあらためて現実を突きつけられる、未来へ来た昨日は何だか夢のようで新しいスタートに心浮かれてさえる自分がいた。しかし、時間がない、間に合わなければロクちゃんが死んじやうかもしれない、何としてでも見つけなくちゃ・・。

「とにかく3人で出来る限りの事はしよう、僕は明日あいつの大学まで行ってみようと思う、日曜日だから会えないとは思うけど」

「ユカ、園田くんの昔の家ってこのすぐそばじゃなかったかしら？」

「うん、行ってみたよ、市営住宅はなかった。老人ホームと小さな公園に変わってた」

「そう・・」

「明日は休みだしあたしも一緒に行く」

「私も行くわ」

「よかった、やっぱりしーちゃんがいらないとね」

「わかった、月曜日からはそれぞれ仕事に行かなくちゃいけないから身動きが取りにくくなる、明日のうちにロクに会える可能性のあることはやれるだけやってみよう」

「じゃ、メモとって」

「4月3日・日曜日・朝の9時に水島駅の改札に集合」
「了解」

激しい雨は相変わらず窓をたたき続けていた、窓に映る赤レンガでできた壁もしつとりと湿り気を帯び、ふと触れた指先から冷たい感触が伝わる。

「極秘会談は順調かな」

「あ、マスター」

「雨の中をわざわざ来てくれたお礼に、はいこれはサービス」

「わ、うれしい」

「レモンケーキね」

「ありがとうございます」

「マスターありがと、相変わらずやさしいね」

「そりゃあ、ユカちゃんは大切な常連さんですからね、そのうち取材に来てよ」

「うぬ、おぬし、なかなか商売上手」

「実は、ロクちゃんを探してるの」

「ロクちゃん？」

「うん、ロクちゃん、この先の市営住宅に住んでた、小学校の頃よく連れて来たでしょ」

「さあ、僕も仕事柄1度来たお客さんは忘れないつもりだけど」

3人は何かを感じ思わず顔を見合わせた。

「私たち2人は？」

「志水さんと内山君」

「マスター、ウルシは？」

「ウルシ？」

「やっぱり小学校の頃に何回か連れてきたんだけど」

「これはまた、どちらもずいぶんと昔の話で」

「わからない・・・ですか？」

「初めて聞く名前ですね」

「そう・・・」

再び3人は顔を見合す。そして、互いに何かがわかったという意思を交換し合うように小さくうなづいた。

「いえ、僕らの共通の友人を明日探しに行くんです、会えるかな」

「そうですか、何やら事情があるみたいですね、でも大事なことは願いつけること、もし会いたいと思っっているならそれを念じ続けること、と僕は思います」

「願いつける・・・」

「そう、希望を叶える最大かつ絶対の条件は思いを持ち続けること、それをやめた時点で希望は失望へと姿を変え、やがては絶望という黒い塊となって心をむしばんでいくものです」

「うん、マスター、わかった」

「明日はきつと会えるわ」

「いや、絶対に会おう」

降りしきる雨は窓の外の世界から他の音を奪うかのように相変わらず激しく地面を打ちつけていた。

「じゃ、明日」

「1つ宿題が出たね」

「えっ、何？」

「マスターはロクとウルシを知らなかった、これが何を意味するか」

「あたし、ロクちゃんをよくがらくた館に連れてきたの、ウルシも確か3回くらい」

「もちろん12年前の話だけど、なぜ2人だけがマスターの記憶から消えたのかってことだ」

「ええ、それがわかれば2人と会えるかもしれないわね」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1208v/>

僕たちの挑戦

2011年10月14日01時57分発行